

同朋
選書
35

生きるよけい

平野修

目次 ● 生きるということ

第一部 自らが主となる出発

一、関係性を問い直す 2

弾むような体や言葉を取り戻したい／準備ばかりしている私／人は三つの関係を生きている／与奪の権利を生み出すもの／割り切れない「余りの感覚」／自らを主として見出す

二、「私」を問い直す 31

出発点が見えない／食べなければ生きていけない／尽くすことのできない課題が見出される／この世界が、利用するだけの世界になっていないか／問題は肯定されてある「私」の存在／「私」というものの正体／「私」というものは外に合わせる生き方しかで

きない／雪解けの時／言葉の海をわたる

三、自ら生きている 74

生きていることが不透明になっている／未知な時に向かいながら／情報の氾濫の中でシラケてしまふ／考える力、批判する力を失わせるもの／豊かさや平等性の問題／日本人にとっての自然／自然にやってきたことを問い直す／「自ら存在」と叫びきれない／本当の優しさ、強さ／人間は関係性に耐えられない／言葉を持っているということ／宗教の問題／世界といっしょに自分はこのに在るんだ

第二部 教え・言葉の海をわたって

一、言葉の現実 116

教えや言葉の中に生まれてくる私たち／言葉が与える影響力／言葉が人の心を占領していく／二つの「言語障害」／「余り」をなくしてしまう現実理解／『教行信証』の三つの序文／自性唯心に

二、このままで終わりたいくない 160

親鸞の眞実信心／蓮如の言葉／信心の物質化と宗教の心境化／深いところで時間に縛られる私たち／大きな枠組みに取り囲まれた私たち／制度が私たちの立場を生み出す／与えられた立場に乗るはずのない自分／自分への信頼と世界への信頼を回復する

三、意志・意識を超えたもの 194

何を同一のものとして見出すのか／繰り返しの食と性を持つ身の発見／この身こそ人間の大地である／仏教の歴史／「身」へのうなずきと救い／文化に属する問題は教えの問題／自然の浄土

第一
部

自らが主となる出発

一、関係性を問い直す

弾むような体や言葉を取り戻したい

「今、人間としてー 私の声が、聞こえますか」という今回のテーマですが、とりたてて難しく考えなくていいかと思えます。

誰でも体いっぱい使い、そして感情や肉体が感じられるような言葉を話して、その言葉が相手に受け取られていく。誰もそんなことを思っているのではないかと思うのです。ただそのことについて、何かの理由で体いっぱい動かさせない。ある事情で感

情のこもった言葉が話せない。そんないろいろな弁解や事情や理由をたてます。しかしながら、ちょうど小さな子どもたちが、病気以外はゴムまりのように体を弾ませはすて生きている。そしてセンテンスがためであつても、その用法が無茶苦茶むちゃくちやであつても、ありつたけの言葉を使って自分のことを伝えようとする。本当は私どもも、そういうふうにも生きたいはずだろうと思うのです。大人だから、そんなことをしなくてもいいということではないと思います。大人であろうと、子どもであろうと、おじいさん、おばあさんの歳になつたとしても、人間は体いっぱい動かして、肉体の宿つたような言葉を話していきたくははずです。ただそういつたことが、どうしてもできない。いろいろな事情でできないと、私ども考えているのではないのでしょうか。

それはいろいろな理由があると思えます。体いっぱい動かして大きな声でしゃべろうとした時に誰かが、「あなたの学校の成績はね」という言い方をされたら、もうそんな気持ちには起こらなくなる場合もあるでしょうし、一生懸命動き出そうとした時に「あなたどこの学校を出たの」と言われただけで、もう身動きができなくなったり、

「職業は」あるいは「あなたのおとうさんは、どんな仕事をしているの」と。そんないろいろな事情から、自分が力いっぱい動こうとしても、動かさせないものがあるのではないでしょうか。ですから、我々が進んで弾むような体や言葉を失ったのではなくて、いろいろな理由で不本意ながらそうなってしまうのでしょうか。二歳や三歳の子どもが持っている弾むようなものを我々も持っていたのに、その後我々が経験してきた教育課程、あるいは社会経験といったものが、我々を不本意ながら弾ませないようにしているのではないのでしょうか。

「今、人間として」ということを、大げさにとってもらわなくていいのではないかと申し上げた理由は、そんなことだと思うのです。誰しも、立ち枯れていくような生き方を趣味にしている人はいないと思います。「だって仕方ないじゃない」ということで、誰も自分の生きることを終わらせたくない。それは誰にも共通していることでしょう。そんな不本意ながら、仕方がないという形で生きている生き方を、もう一度捉え直してみようではないか。その不本意ながらということは、本当にどうしようもな

いことなのか。そこをもう一度取り上げない限り、我々が生きているということが、非常に味気ないものになる。色あせたものになるのではないか。

浄土真宗の教えを聞こうという、こんな集まりだからといって、別に妙なことを考えるのではなくて、もう一度自分の弾むような言葉や肉体を取り戻すために、どんなことが残されているのか。「今、人間として」というテーマは、そんな内容を持っているのではないかと私は理解しています。それで、いくつかの視点を挙げて、どうして我々が「不本意ながら」という生き方になるのか、少し問題にしてみたいと思います。

準備ばかりしている私

島尾敏雄しまおとしおという作家がいます。数年前にこの人の『死の棘とげ』(新潮社)という小説を

読んで、この作家に大変興味を持ちました。

「出発は遂に訪れず」（新潮社）という題名だったと思います。それは鳥尾さんの自伝風に書かれているものですが、戦争に行かれて特攻隊員になった時から、彼はいつでも死ぬ準備をしているわけです。「今日、声がかかるんじゃないか」。そのために、「もしかしたら今日ではないか」というので、朝からずっと「お前、出てけ」と言われる心の準備を必死の思いでやるのですね。それで日が暮れる。「ああ今日はなかったんだ」。それで翌日からまたその準備をするのですね。特攻隊ですから、ともかく相手の所へぶつかっていくだけですね。特に鳥尾さんの場合は、魚雷艇ぎょらいていですから、相手の船へ自分からぶつかっていくわけです。ですから、死ということを初めから覚悟しなければならぬわけです。今日、その死ぬ日が来るのか、そのための緊張をずっと強いられてくるのです。今日出発かということ、ずっと続けながら、とうとう終戦になってしまった。そのことを「出発は遂に訪れず」ということで、表現されていらつしゃいます。そのことは、鳥尾さん自身の体験ですけれども、その体験が持つ意味を、彼は小説として表現してきたかと思うのです。けれども自分がやってきたことが、いつも準備であって、出発にならないという問題です。

我々の生活も、実はこのための準備、このための準備ということで、準備だけはずっとしてきている。よく言われますように、幼稚園・保育園は小学校の準備ではない。しかし現実には、ほとんどその準備になっている。小学校は中学校の準備ではないと言いつつ、やはり準備になっていきます。若いお嬢さん方で仕事につかれる場合、今は経済的な問題などもあって、こんな言葉はあまり聞かれませんが、お嫁にいくまでの間、結婚資金を貯めるために働いています、と。とすると、仕事も一つの準備になってきます。次のために、人間最後に何が残るかということ、自分でお葬式を出すためのお金を貯めておかなければならない。結局、何を一生してきたか、一生懸命になって準備を積み重ねているんです。そして遂に出発することができない。それはもう、我々にとっては大変深刻な問題になります。本当は先ほど言いましたように、身を弾ませ言葉弾ませて生きたいわけです。そのための準備は、ずっとやって

きている。そして遂に出発ができなかった。

島尾さんという人は、そんな経験をしてくると、戦後になって街を歩いていても「特攻隊崩れ」だとすぐわかるというのです。体に出てきている。準備ばつかりの非常な緊張を強いられてきて、そして出発が与えられなかった人間の体の様子というものがはつきりと出てくる。そんな意味からいって、我々の体つきはどうなっているかということですね。準備ばかりしている人間。田舎へ行きますと、自分のお墓までちゃんと作って、あとは年月日を入れるだけに用意している人がいらつしゃいます。そういうのを見て評価する人がいます。「あの人はしっかりした人だ」と。死ぬ準備までしている、「何と手まわしのいい人か」と。それは準備ばつかりすることが、大勢を占めてきている社会だからこそ誉められるのです。本来は大変悲しいことです。

人生というのは、誰にとつても未知なものです。わかり切ったものではないはずです。文字通り、明日何が起こるか分からないし、全く未知であることが、誰にとつても人生の姿です。それが、お墓の準備から始まるのですから。だからたとえお墓まで作って、そして大過なく過たいかごしたとしましても、それは一体どんな意味を持つのか。人生で大きな失敗もしなかった。大きな過ちを犯さずに終わったとしましても、それは一体何だったのでしょうか。ただ、あまり間違いをしないで終わった。それで「それが一体どうしたんですか」という問いに答えられるかどうか。一応、間違いはなかった。それでどうしましたかと問われても、我々それ以上の答えは持っていません。

人は三つの関係を生きている

そうしますと、私たちがこの世に生まれてきたことと、その生まれてきたこの場所、この世界との関係からまずはずつきりさせなければならぬのではないかと思います。そこで、このことを考えていく上で、「功德く徳莊しょう嚴げん」という言葉を使います。「功德莊嚴」という言葉、これだけは今から使っていく共通の言葉として、まず認めていただ

きたいと思えます。

「功德」という意味は、「属性」という言葉がいちばん基本的な意味です。物の持っている属性、例えば、簡単な言い方をしますと、チューリップの花と桜の花、何が違うか。花という概念からいけば、チューリップの花も、桜の花も一緒です。そのチューリップの花と桜の花が違う。その理由は功德が違うからです。その持っている性質、それに属する性質が違うから、チューリップの花と桜の花は違うのです。属性というものは、その物が持っている性質、あるいは働き。そこで、この功德で何を問題にするかという人間です。人間が持っている性質、または人間が持っている働き、これを功德と言われます。人間の性質の中には優しいという性質もあります。非常に乱暴だという性質もあります。あるいは、しょぼんとしてしまうという性質だったりします。いろんな性質を人間は持っております。それが功德という意味です。

もう一つ「莊嚴」という意味は、普通はデコレーションケーキという場合の、「デコレーション」が莊嚴の意味です。デコレーションケーキとは、いろいろ飾りが入っていますね。特にあのクリスマスのケーキですね。いろいろな飾りがしてあります。見た目にも、「食べてみたいなあ」という気持ちを起こさせます。そんな「飾り」という意味が一つです。

しかし、もっと大事な意味が莊嚴ということにあります。それは、「置換・位置」という意味があります。そこから展開して、「秩序」という意味まで考えられます。これが莊嚴ということの意味です。

例にとりますと、このコップと水差しが二つ並んで置かれたこの配置だったら、誰も疑問に感じません。しかし、これをいろんな別の配置にしたら、疑問に感じます。配置が悪いからです。しかし、これは水を飲むためのものですから、どんな置き方をしても可能なわけです。そんな考え方から出てくるのが我々の生き方の問題です。

我々が、どうやってどう生きたってかまわないのではないか、という場合ですね。こんなことも言っているでしょうし、こんなこともやっているでしょうし、これはどう生きるでも一緒ですよ。私がどう生きようと勝手にしようという場合には、ほとんど

そんなことが意味されます。そうしますと問題は、配置の問題なのです。そこに莊嚴という意味があります。そうしますと人間の性質というものは、その配置の関係によって変わってくるということです。それを古代インド人が見つけたのです。そのことを極楽じくらくとか浄土じょうどとかという問題を解くのに考えたのです。

私ども、どんな生き方をしてもそれは考えられます。よく言うように、「女の子は女の子らしく」というのも、これは一つの配置関係があるわけですね。それはその発言をした人は、女性はこんな位置関係でなければならぬ。男の子が乱暴な場合、それと違うような位置にいななければならない。例えば、男の子がカエルをつかまえて、踏みつぶしたりしていた。そこにたまたま女の子と一緒にあって、踏みつぶして喜んでみた。それを見ていた父親が、「お前はなんてことするか。女の子は女の子らしく」と言った場合、その父親の中に女性の位置というものがあるからです。男性が乱暴でも、女性は優しくなければならぬ。そんな位置関係を持つならば、その子は女の子として認めることができる。ということ、性質と配置の関係ということがあるわけです。我々も、いつでもそれを働かせているわけです。

例えば、何か生意気なまいきなことなんか言っている。それをやっつけようと思って、そこに学歴という問題を持ち出してくる。私の今行っている大学は、大変小さな大学です。し田舎にある大学です。それはそれでいいのです。ただ、学生たちが何かのことで、国立大学の人たちと一緒にすることがありました。すると、何かやっつけても——たぶんそれは、うちの学生のひがみと思うのですけれども——何か言うと、「何よあの人たち、国立大学だと思っていばっている」。そんな捉え方をする。その学生たちは、人間の性質というものを、人間の在り方というものを、学歴で、国立大で、あるいは田舎にある短大だという位置関係で人間を捉えるわけです。そうしますと、人間の性質は生きてこないのです。どこで人間を捉えるか、配置とか位置のとり方によって、人間の性質が駄目になるということがあります。そういうものをみんなひっくるめて、「功德莊嚴」という言葉で表してきたわけです。

その功德莊嚴に三種類あります。一つには、人間と自然環境との配置関係におい

て、自然は人間が利用するためにあるのだと、無意識のうちにも前提として立てられた場合、その位置関係はお互いを駄目にする形になります。その例として公害の問題です。公害も人間と自然との位置関係、配置関係がうまくいかず、功德といわれる、それに属する性質のようなものが、みんな壊されることにより起こります。

例えば、スーパーに買い物に行きます。そうすると、なぜこんなにもリンゴが綺麗なのか、なぜイチゴはあんなにもよく色づいて、粒ぞろいになっているのかと目を見張るようなものがあります。しかし、あのリンゴの美しさは、やはり異常だと思うのです。その場合にリンゴというものをどう見るのか。そこに経済の考え方が入ってきた場合、リンゴが売れる売れないの問題から、ともかく薬品を使っても何であれ、見栄えをよくして、売れるようにしたいとなってきました。リンゴに異常な光を与えるような薬品は、リンゴに異常を与えているのですから、それを食べる人間に異常を与えないことはありません。そうしますと、リンゴは一つの食べ物としますと、これも一つの環境です。人間と食べ物という環境の位置関係に、儲けるとか、儲けられない

ということが入ってきて、位置関係、配置関係が決まってきた場合、人間も駄目になりますしリンゴも駄目になります。これが人間と自然環境との関係であります。

そして、第二に人間と人間の間関係があり、第三に個人個人の配置関係、そんな三つの配置関係が考えられるかと思えます。それで人間が全体として捉えられてきます。私自身の関係と、私を取りまく環境との関係、そして、私と他の人間との関係、この三つの関係を人間は生きています。そこには配置関係がきちんとできています。だから、その関係のあり方によっては、どうしようもないということが起こってきます。

そうしますと、最も人間の持つている性質を伸ばす配置関係は、どういう関係でなければならぬのか。自然との位置関係において、自然の力も出し、自分の持つている性質も本当に伸ばすことができるのか。また、自分と自分との関係の中で、どういう位置づけ、配置づけがなされると、自分を本当に伸ばすことができるのか。他との人間の関係において、どういう配置関係を持ったならば、人間の性質を本当に伸ばすことができるのか。そのような人間の問題に答えている言葉が、「功德莊嚴」という